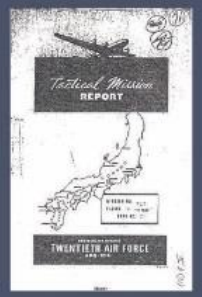
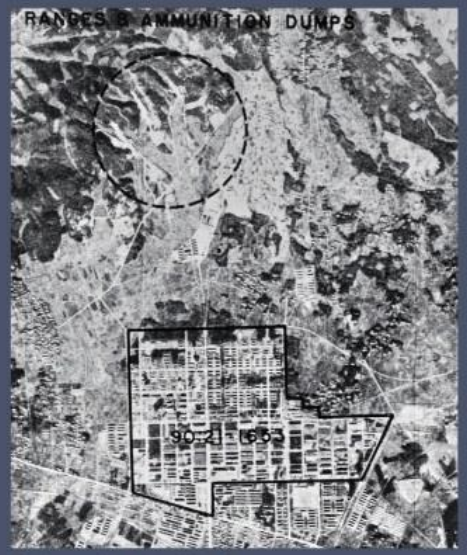
米軍の空襲計画と昭和20年5月19日の空襲

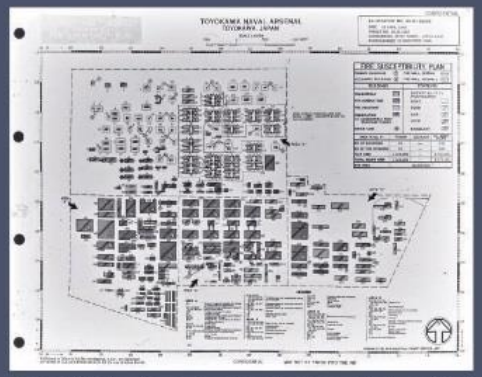
昭和20（1945）年に入ると米軍による軍需工場や都市を標的とした本土空襲が本格化し、豊川周辺でも6月19日に豊橋市、7月20日に岡崎市が空襲を受け、大きな被害が出ました。豊川海軍工廠でも5月19日にB29爆撃機により指揮兵器部附近に爆弾が投下され、約40名の犠牲者が出ました。このように空襲の脅威にさらされながらの兵器生産作業でありましたが、本格的な空襲を受けなかったため米軍は豊川海軍工廠の存在に気付いていないのではと噂されたこともあったそうです。しかし米軍は昭和19年11月23日に上空より工廠の写真撮影を行い、施設の構造などを分析し、綿密な空襲の計画を立案していました。



作戦任務報告書
（国立国会図書館蔵、原資料：米国国立公文書館）
豊川海軍工廠空襲の計画及び結果の報告書。目標の重要性として海軍兵器生産ではナンバー1であり、日本の主要な海軍工廠の一つであることが記されています。また、500ポンド爆弾を使用することについては、施設の構造上大量の爆弾で直撃することで目的を達することができるとされ、日本軍の反撃として20から30機の戦闘機が要撃してくることを予想していたようです。



豊川海軍工廠と周辺の空中写真
（国立国会図書館蔵、原資料：米国国立公文書館）
昭和19年11月23日に米軍により撮影されたもの。上の丸で囲われた地区には火薬庫や試射場がありました。



上空より撮影した写真を元に作成された豊川海軍工廠施設の分析資料
（国立国会図書館蔵、原資料：米国国立公文書館）

体験者の証言

五月十九日の日は夜勤だったので、空襲があった時は工員寄宿舎にいました。夕方頃に指揮兵器部に出勤すると機械工場の北東付近が被害を受けていて、・・・